

景虎の権力形成と晴景

前嶋 敏

はじめに

長尾景虎は、天文十七年（一五四八）十二月晦日、越後守護上杉定実の仲介のもと、兄晴景から家督を譲渡されて春日山城に入城している⁽¹⁾。この家督継承については、両者の対立を前提としていたとする指摘が多く見られ、たとえば矢田俊文氏は「景虎は栖吉長尾・三条長尾勢力の支援を得て、兄晴景から権力の座を奪ったのである」とする⁽²⁾。しかしながら、池亨氏が「両派間の衝突の実態は定かでない⁽³⁾」とするように、その経過は具体的に明らかになっていない。戦国期における武家の家督継承（＝権力移行）は、越後守護代の長尾氏に限らず、武田氏や今川氏といった守護家にも起こる武家権力論の重要な論点である。本稿では晴景と景虎の関係を軸に、権力移行の具体的な検討を通じて、景虎の権力形成について考察したい。

なお、田中義成氏が「兄晴景家督を継いで、領国を維持するの力足らざるを顧み、謙信は家督を奪うにはあらざれども、家国の為に強いて高圧的手段に出て、兄に代りて家督を継げる⁽⁴⁾」とするなど、晴景と景虎の対立の要因として晴景権力の脆弱性が指摘される場合も多いが、いっぽうで筆者は晴景に主体的な権力形成の姿勢がうかがわれ、とくにその初期においては阿賀北衆も晴景にしたがう様子をみせていることなどを指摘している⁽⁵⁾。このことからすれば、

謙信の家族・一族と養子たち

片桐 昭彦

はじめに

本稿では謙信の家族や一族、養子について考える。謙信と家族や一族、養子たちとの関係を知るとは、謙信の育った環境や立ち位置、謙信の心底にある価値観などに迫ることのできる重要な論点となる。しかしながら、謙信の父母・兄弟姉妹や一族、養子たちのことは、従来の研究でも未詳とされ、わからないことが多い。その大きな原因は、同時代の一次史料に限りがあり、近世に編纂・作成された年譜や系図類に頼らざるを得なかったことにある。近世の年譜や系図類であっても、確かな伝来に基づいているのであれば問題は無い。しかし、謙信の年譜・系図の場合には、①謙信が嫡子として生まれなかったこと、②途中で山内上杉家を継ぐことになり実家である府中長尾家の情報が残りにくくなったこと、③後継者が上田長尾家から入嗣した養子であったことなどにより、曖昧な情報や記憶に基づかざるを得ない部分が多かったと考えられる。

謙信の家族や一族、養子の歴史的な事実を明らかにするには、近世に作成された系図や年譜の内容と一次史料を照合し、信頼できる部分が何かを整理しておく必要がある。いうまでもなく一次史料とは同時代に発給された文書や記述された日記などになるが、本稿では『越後過去名簿』⁽¹⁾に注目したい。この史料は高野山清浄心院に残る供養帳の抜

上杉謙信の雪中越山

築瀬大輔

はじめに

冬將軍という言葉がある。シベリア寒気団のことである。極東地域でこれが南下すると、日本列島では日本海側に豪雪を、太平洋側に乾燥した季節風をもたらす。厳しい気象を手強い武人に喩えた表現(ジェネラル・ウィンターの和訳)である。戦国時代の末期、冬の三国山脈を縫って、それも毎年のように日本海側から関東平野を攻め続けた上杉謙信はまさに冬將軍であった。謙信はいつたいなぜ冬將軍と化したのだろうか。

謙信の関東越山はその極端な季節性に注目した藤木久志氏は、謙信の関東越山には農兵の冬季の飢えを凌ぐというサバイバルの側面のあったことを明らかにし、そこに中世の食うための戦争像を見出した。⁽¹⁾ その意味で藤木氏の戦争論はこの問題に明解な回答を与えた研究と言える。一方、齋藤慎一氏は戦国期史料に散見する「路次不自由」の文言に注目し、謙信の越山と軍勢の移動を例示しつつ、不自由と認識される要因のひとつに積雪による通行困難や道路閉鎖という事情があったことを指摘している。⁽²⁾ 服部英雄氏は天正十二年とされる佐々成政の冬の立山越えに対して「自殺行為」であると疑義を呈した。そして、体制としての道路管理の視点と現地踏査により、成政が越えたのが実際には信飛国境の安房峠(鎌倉街道)であったこと説明している。⁽³⁾ 謙信といえども降雪も積雪もものともせず、冬の三国山

豊臣政権と上杉家

矢部 健太郎

はじめに

武田信玄とその子勝頼の関係がそうであったように、上杉謙信と景勝の関係もまた、「偉大なカリスマ」と「凡庸な後継ぎ」としてとらえられることが少なくない。しかし近年、長篠合戦やその前後の外交交渉などを素材として、武田勝頼の軍事・外交手腕は再評価される傾向にある。⁽¹⁾ その一方、謙信死後の跡目争い(御館の乱)に勝利した上杉景勝については、いまなお検討すべき課題も多い。武田家は信長・秀吉の天下一統事業の途中に滅亡してしまつたわけだが、上杉家はその後も中央政権と複雑な政治交渉を重ね続け、江戸時代を生き抜いた家である。加えて、織田・豊臣といった中央権力に関する研究自体、近年になつて多岐にわたり新たな展開をみせている。それゆえ、特に景勝と豊臣政権との関係性については、さらなる研究の深化が求められるのである。

御館の乱は天正六年(一五七八)三月十三日の謙信急死を受けて、養子の景勝(実父長尾政景)と景虎(実父北条氏康)が争つた内乱である。景虎の自害、本庄秀綱や神余親綱らの平定により景勝が最終的に勝利したのは、天正八年のことになる。こうした混乱により、上杉家は織田家をはじめとする周辺勢力の侵攻にもさらされることになるが、その二年後の本能寺の変勃発もあり、家の崩壊自体は免れる形となつた。すなわち、新たな上杉家当主・景勝が真に対峙す